

浄土

monthly JODO

2020
May

5

貧乏董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



天地 61cm (上下の一文字を含む)、左右 25.5cm

れぞれの手に、弓、法輪、三叉戟、錫杖(っ)、剣を持ち、女人の髪を掴んでいる。足下に一匹の邪鬼を踏まえ、両脇に二童子と下部には四鬼神を伴っている。夜明けを告げる二羽の鶏、二匹の猿も描かれている。猿は三匹(見ざる、聞かざる、言わざる)が描かれることが多いが、ここでは御幣を担ぐ二匹である。

庚申信仰については連載の31回目「中野区野方の庚申塔」で触れた。中国道教の説く「三尸説」をもとに、仏教・神道・修験道・呪術的な医学や、この国の民間のさまざまな信仰や習俗などが複雑に絡み合った複合信仰である。道教では、人間の体内には三尸という三種類の虫が棲み、人の睡眠中にその人の悪事をすべて天帝に報告に行くという。そのため、三尸が活動するとされる庚申の日(六〇日に一度のかのえさる、こうしん)の夜は、眠ってはならないとされ、その夜は女人禁制で、男たちが集まって徹夜で過ごすという「庚申待」の風習があった。

庚申待は平安貴族の間に始まり、江戸時代になると庶民の間に広く広まった。信仰というより体のいい徹

夜で呑み食いをする口実でもあったのだろう。

この庚申待のメンバーである庚申講のグループは、庚申待を十八回やると、記念として庚申塔を建てたといわれている。六〇日に一回庚申の日がめぐってくるわけだから、一〇八〇日で庚申塔を建てたことになる。写真の青面金剛像掛軸は江戸時代のもの。庚申待の夜に架けられ、その下で男たちが朝まで呑み食いをしたのである。合羽刷の大量生産品であるから、骨董的に値打ちのあるものではない。傷みもあるし、本紙と上下の一文字しか残っていない。この掛軸をくれた知人によれば、軸棒に巻かれた状態で売られていたらしい。骨董市には巻かれた掛軸がよく売られている。

上部には日輪と月輪が描かれ、六臂の青面金剛はそ

浄土

2020/5月号 目次

「道・病」の不如意.....	宝田正道	2
新連載 寺々刻々①.....	鶴飼秀徳	8
新連載 インド・釈尊あれこれ紀行①.....	佐藤良純	12
連載 微風吹動	工藤量導	14
連載 江戸の川を歩く③⑦.....	森 清鑑	18
連載小説 渡辺海旭⑩⑥	前田和男	24
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	31
編集後記		32

表2 貧乏骨董

三宅政吉



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙写真＝鬼海弘雄

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

浄土アーカイブ ● 本誌昭和50年8月号

連載・法然上人の人と生活より

道・病の

不如意

一九四一—一九八八
浄土宗初代出版室長

宝田正道

法然上人の出世時代より約一世紀前にあたる、いわゆる院政期に、興福寺や延暦寺の大衆が、神木や神輿をかついで入洛し、わがまま勝手な要求を朝廷につきつけた強訴は、白河・鳥羽・後白河の三代だけでも六十回を数える。さすがの白河法皇もこれにはたまりかねて、歎かれたのが、有名な次の言葉である。

賀茂河ノ水、双六ノ賽、山法師ハ、是レ朕カ心ニ随ハサル者

〔源平盛衰記〕四「白山神輿登山ノ事」

つまり、賀茂川の洪水や双六のサイコロ、それに南都北嶺の僧兵の暴挙、この三つのものは、天下万民の頂点にあってこれを支配する院政の当事者の力をもつてしても、どうすることもできない、というのである。このうち、洪水やサイコロは、天災とか運不運ということで、一応あきらめもつくが、一番くやしく憤ろしいのは山法師の所業であろう。明らかに人災に当るからである。それも学問修行を志し、庶民教化の大役を荷^{にな}っている僧侶自身が、学をなげうって刀杖をたずさえ、袈裟に代る甲冑を身につけ、群衆をたのんで乱暴狼藉の限りを働く、というのだからどうしようもない。「末法到来」「仏法破滅」の意識が強まってくるのは当然のことである。そして花の都はやがて源平争乱の巷と化し、この世の地獄さながらに貴族は没落の一端を辿り地方の実力者武士の登場を俟つことになってくるのである。上下を問わず平和安穩な生活を願う人間にとって、この世を厭^{いと}わしく思い、せめて静かな山林に籠居したいと欣^{ねが}う心の生じるのも、もっともなことではあるまいか。

このような時代を背景として生れ育ち、そして出家受戒した法然上人が、出離の志深く、早くから隠遁の道を求めたのもうなずける。当時、叡山には「朝題目（法華）夕念仏」と

いう、天台貴族向けの常行堂音楽念仏もあつたし、街には空也の系統をひく道俗男女向けの「聖」たちによる勸進念佛行もさかんに行われていた。浄土思想先達の指針書としては、浄土三部経はもとより、源信の『往生要集』や永観の『往生拾因』なども広く読まれていた。そして南都には藏俊、寛雅、慶賀などという、法相、三論、華嚴の諍々たる学者たちも健在であつた。上人は、もっぱら「名利を捨ててこのたび確かに生死を離るべき道」のみを追ひ求めて、これらの環境を追認体験しようとし、試み、「求法の一事を祈請のため」に嵯峨の釈迦堂へ参籠もしたし、南都遊学の労もいとわなかつた。保元の乱が起つた年（一一五六）、生年二十四歳の青年僧としてであつた。いわゆる厭離穢土欣求浄土への捨身的探究である。

しかし、乱想のままの凡夫でも往生できる、という確たる道は、だれも容易には教えてくれず、上人は泣く泣く叡山の黒谷別所の師叡空の許へ帰らざるを得なかつた。そのときの感懐が次の法語である。

ここに我等ごときは、すでに戒・定・慧の三学の器にあらず。この三学のほかに、わが心に相應する法門ありや、わが身に堪えたる修行やあると、よろづの智者に求め、もろもろの学者にとぶらひしに、教うるに人もなく、示すにともがらもなし。（『勅伝』二六）

このときの断腸の思いは、すぐ続く「しかるあいだ、なげきなげき経蔵に入り、かなしみかなしみ聖教に向ひて」という一語に、遺憾なく表わされている。だから、善導の『観経疏』の一文によって回心をとげたときの感激が「深く魂にそみ、心にとどめたるなり」という歓喜の声となつたのもむりはない。その間の籠居およそ二十年、艱難辛苦と孤独の深さを思いやるべきである。

およそ上人八十年の生涯において、最大の悩みとされたことが少くとも三つはある。先に述べた白河法皇の嘆きになぞらえていえば、上人の三大不如意は「道の発見と病と門下の邪義」とであろう。

この三つの苦悩のうち、第一は今述べたとおり、登山から立教開宗まで、主として叡山生活をしている間中持ち続けられたものである。しかし、これは「一心専念弥陀名号……順彼仏願故」の一文に救われ、凡入報土の道として確立された以上、承安五年（一二七五）には一応解消したといつてよい。次に上人を嘆かせたのは第二の不如意「病」である。元来、上人は体格も立派だったし、中年まではこれという大病にかかることもなく、比較的健康体であつた様子である。それもふだんから衣食住を念仏の助業と考えたり、無理をせず摂生に努めていられた賜物であろう。ただ、晩年近くなつて、さすがに少しずつ病気に罹られる率が高くなつたことは否めない。特に「瘧」が持病となつたらしい。「瘧」というのは、マラリヤ性の熱病であつて、「間闕熱」ともいわれ、一日のうち数時間を限つて時々高熱を発するという型の病氣である。自分でもそれを自覚しておられて、仏道を求める心の起らないことと病氣だけが私の嘆きだ、と次のように述懐していられる。「道心のなき事」は上人の謙遜であらうと考えるにしても、「病」にはさすがに参つた、という表情がうかがわれる。

まことに此身には道心のなき事と病ばかりやなげきにて候らん。（『要義問答』）

たとえばこういうことがある。建久八年（一一九七）といえば、上人六十五歳で、二祖聖光が入門した年であるが、上人はいささか病に臥つていられたことがあり、翌九年正月からは草庵に引籠つたまま、どこへも出て行かれなかった。多分、例の「瘧」が起つたの

であろう。九条兼実とは文治五年（一一八九）八月、法文語や往生業について語って以来、毎年のごとく授戒、法談を重ねてこられたのであるが（『玉葉』）、とうとうそういうわけで兼実の邸へも赴かれなくなつた。兼実は大変心配して、上人のもとに使者を遣わし、年来教誡を承ってきたが、心腑におさめがたい点もあるので、浄土往生の要文を記してほしい、といつてきた。「かつは面談にならずへ、かつは後の御かたみにもそなへ侍らん」というのである（『勅伝』十一）。つまり、兼実は、このときの上人の病状を重くみて、もはや命も危いのではないかと案じたのであつた。そこで上人も、「仰せを蒙り」、懇請もだしがたく、筆を執るにいたつたのが、「念仏の要文を集め、あまつさえ念仏の要義を述」べた『選択本願念仏集』である。いわばこの書は、上人の没後遺文のつもりで述作せられたものといえるだろう。逆にいえば、それほど上人は重病の床に臥されたとも考えられる。一人の人間として、さぞ悩まれたことであろうことは察せられる。

また、元久二年（一二〇五）は、上人七十三歳で、四月には親鸞に『選択集』を授けられてゐるが、八月にやはり「瘡」を患われた。兼実がこれを聞いて驚き、医者呼んでいろいろ手当ての策を講じたが薬効かんばしくないで、安居院の法印聖覚を招いて祈請すべく参勤を要請することになった。ところで聖覚も瘡病にとりつかれてゐたが、師命あつて翌日払暁に小松殿へ参じ、説法をしたところ、二人とも同時に瘡病が治つたという。「まことに末代の奇特、そのころの口遊くちやまにてぞありける」と伝記は伝えている（『勅伝』十七）。思うにこの前年（元久元年）の十月頃から延暦寺の衆徒が騒いで専修念仏停止を座主真性に訴えたので、上人は十一月七日、『七箇条制戒』をつくつて「制法に背く輩は、これ予が門人にあらず、魔の眷属なり。更に草庵に来るべからず」と厳しく門弟を戒められた。

このときの心労が尾を引いて翌年に持ち越され、病気の再発を促したものであろうと考えてもよいのではなからうか。

なお、上人の症状や治療法は、別の年の患いとき、津戸三郎為守が心配して見舞に上京しましょうという手紙を出したのに対して送られた御返事によると、まず風邪をこしらせて口が乾き、水が欲しくなつて骨身が痛むので、灸をすえたり温湯で湿布をしたり、唐から渡つた舶来薬を飲んだりするのが、常であつた模様である。すなわち、次のような上人の消息が残っている。

この正月より別時念仏を五十日申して候しに、いよいよ風をひき候て、二月の十日ごろより少し口のかわく様におほえ候しが、二月の二十日は五十日になり候しかば、それまでとおもひ候て、なをしゐて候しほどに、その事がまさり候て、水などのむ事になり、又身のいたく候事などの候しが、今日までやみもやり候はず、ながびきて候へども、又ただいまいかなるべしとおほえぬ程の事にて候也。医師の大事と申候へば、やいとをふたたびし湯にてゆで候。又様々の唐のくすりたべなむとして候氣にや、このほどはちりばかりよき様なる事の候也。

（津戸三郎へつかわす御返事 四月二十六日付）

※なお本稿は「道・病・邪義」の三不如意」から抜粋したものです。

新型コロナウイルス
の連鎖と仏教

普段はごった返す京都・渡月橋界隈



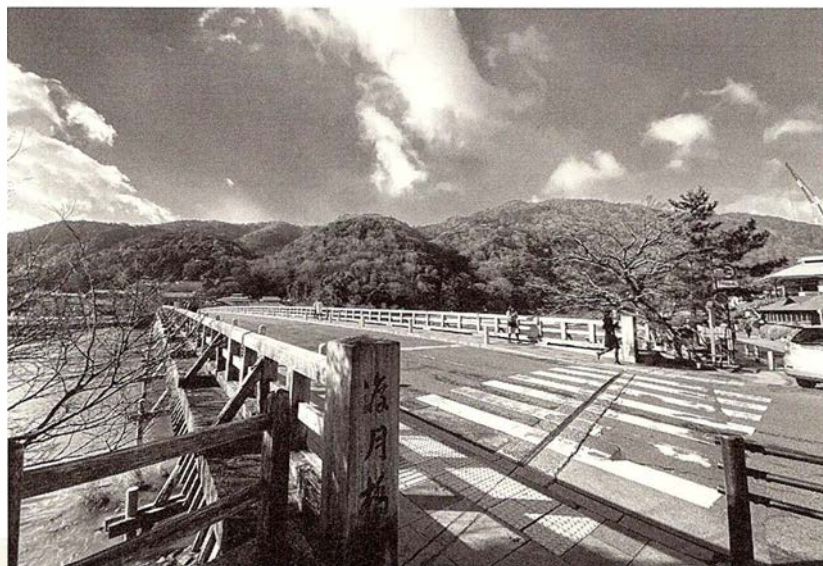
『寺院消滅』『教養としての仏教』著者

鵜飼秀徳の
寺々刻々

「百万遍」で知られる、京都の浄土宗大本山知恩寺。その縁起にはこう書かれている。

「元弘元（1331）年、第8世善阿空圓上人の時、地震がもとで京都に疫病が蔓延しました。それに心を痛めた後醍醐天皇の勅命を受けて弟子らと共に七日七夜にわたって百万遍の念仏を称えながら大念珠繰りをしたところ疫病が治まったことから『百万遍』の号が下賜されました」
それ以来こんにちに至るまで、知恩寺では念仏の根本道場として相続されてきた。

いや、百万遍知恩寺だけではない。実は仏教そのものが疫病との戦いの中で生まれ、発展してきた歴史をもつ。聖武天皇の時代には天然痘が流行し、「疫病封じ」のために国分寺や東大寺の大仏が建立された。「拡大解釈」と語られるかもしれないが、疫病の蔓延と病気の平癒のための念仏や祈りこそが、仏教であったのだ。



さて、今年に入って世界各地へ広がりをみせているのが新型コロナウイルスである。未知のウイルスは社会全体を恐怖に陥れた。政府のイベント自粛要請をきっかけにして、様々な行事が中止に追い込まれている。学校の休講措置や春の高校野球の中止をはじめ、東京五輪も延期となった。

世は無常なのだ、とつくづく感じる次第である。

さて、いつもは社会の動きに敏感とはいえない仏教界も、今回のコロナ騒ぎの対応だけはなぜか「早すぎるほど早かった」印象だ。先述の知恩寺では、春の彼岸法要や御忌大会などの中止を発表した。多くの寺院で、拝観停止や法要中止などの措置が取られている。宗議会の期間を短縮する宗派も小さな寺でも、お彼岸での檀家の来寺や法要を禁止したりするところも少なくない。

こうした仏教界の対応に、コロナ蔓延当初、私はどうも腑に落ちない思いでいた。小規模の宗教行事の取りやめなど、過剰反応ではないか。この騒ぎの中でも企業が営業活動を止めた、なんて話は聞かないし、そんなことをすればたちまち倒産してしまうだろう。宗教団体が祈りを止めるということは、自殺行為ではないか。

公演中止を伝える看板を出す京都・南座



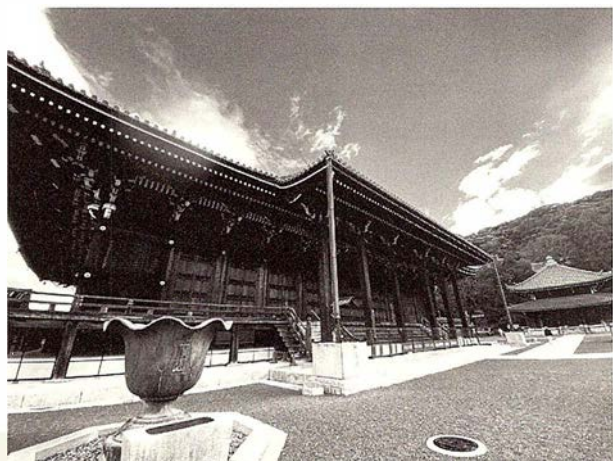
政府の専門家会議は「新型コロナウイルスの感染症対策の見解」という文書を出し、これまで集団感染が起きた空間の共通点として、①換気の悪い密閉空間であったこと②多くの人が密集していたこと③近距離（互いに手を伸ばしたら届く距離）での会話や発声が行われた、という3つの条件をあげ、これらが同時にそろう場面を避けるように呼びかけている。

この文書をふまえると、日本の寺院における感染拡大のリスクは考えにくい。多くの寺院は空間が広く、戸をあければ風通しも良い。また法要の最中に談笑をすることもまず、考えられない。文部科学省は「子供が公園で遊ぶことは問題ない」と述べているように、募参りで感染を警戒する必要もない。

私は、今回の新型コロナウイルス騒ぎの一因は、SNSなどを使った情報拡散にあると見ている。先述したようにウイルスの世界的流行は、数年から10数年スパンで起きている。今回が過去と違うのは、世界的にスマートフォンが流通し、誰もが情報を流布できる点にある。結果デマが流れ、社会混乱に陥った面がある。

私たちがやるべきことはシンプルだ。手洗い、うがい

知恩院でも御影堂落慶法要などの中止が相次く



うかい・しゅうとく 1974年京都市生まれ。大学卒業後、新聞記者・雑誌編集者を経て、2018年にジャーナリストとして独立。社会と宗教との関係性を明らかにすべく、取材を続ける。著書に『寺院消滅』（日経BP）『仏教抹殺』（文春新書）など多数。近著に『ビジネスに活かす教養としての仏教』（PHP研究所）。嵯峨・正覚寺副住職、（一社）良いお寺研究会代表理事、浄土宗総合研究所嘱託研究員、佛教大学・東京農業大学非常勤講師。

を励行し、人混みを避けることに尽きる。

私はパンデミックよりも、もっと恐ろしいことが待ち受けているように思えてならない。社会パニックが広がっていくこと。さらに飲食店やイベント関連会社などの倒産が相次ぎ、自殺者が増えてしまうことである。自殺者数は2019年で約2万人。そのうち1割が経済的な理由での自殺である。だからこそ、私は「無批判に」「過剰に」反応しすぎることもまた、罪深い行為だと思っている。社会不安の連鎖をつくる一員になるからである。したがって「負の熱狂」に、宗教団体は加担してはならないのだ。仏教界は非常時こそ、時勢を広く俯瞰し、冷静に見極め、宗教的・哲学的視座を持って行動すべきだ。そもそも社会の安寧のために務めるのが、宗教者の本来の立場でなかったか。

具体的には、祈りをもって不安にかられる檀信徒の心を解きほぐし、一人暮らしのお年寄りに寄り添い、「優しさの連鎖」をつくって悪意の増長を防いでいかねばならない。ましてや、寺の側から門戸を閉ざすことがあつてはならない。いまこそ、宗教者にしかできないことがある。それを一人ひとりの僧侶が肝に命じなければならない。

釈尊が生まれた地

インドはいまやアメリカ、ロシア、そして中国と同じ世界の大国です。人口13億人、携帯電話10億個、テレビ、ラジオ局は1000局を超えました。

しかし何といっても釈尊、お釈迦様の国です。私は学生時代からお釈迦様の研究でインドへは頻繁に訪れ、長期滞在もしてきました。だいぶ齢を重ねましたが、インド行きが決ま



羊に乗って学校へ行くお釈迦様

ると元気が出てきて、インドから帰ると「先生、若返りましたね」とからかわれることもしばしばです。そうした中、編集部から「仏教を開かれたお釈迦様の聖地を訪れたことのない僧侶がたくさんいます。ぜひ、先生にお釈迦様の国、インドとお釈迦様の話を書いて下さい」と頼まりました。学者畑を歩いてきたので、柔らかな文章は不得手ですが、おつきあいたければ幸いです。

さて、お釈迦様のお生まれはいまのネパール南部テライと呼ばれる地方です。晴れた日には北にヒマラヤ山脈が見えます。場所はルンビニ、もともと女神ルンミンディの聖地でした。母のマーヤーが出産のため帰宅の途中、木の下でお生まれになりました。右の脇腹から産まれたという言い伝えは右側が吉祥とさられていたからです。お母様は産後すぐ亡くなったので義母にそだてられました。生まれた子の名前はゴータマ・シッタールタ、後に釈迦族出身の聖者という意味で釈尊と呼ばれ



お釈迦様の誕生

ました。お釈迦様の一生を表したレリーフには羊に乗って学校に通う姿が表されています。写真の誕生と羊に乗る釈迦のレリーフは、釈迦一代記の彫り物としてたくさん残っています。

お釈迦様の祖先については、代々「オーダナ」（お米の意）の名前がついているところから稲作に従事していたと思われます。王と呼ばれていましたが、おそらく小さな王国であつたのでしょうか。後に隣の国に合併されてしまいます。

また、お生まれになった時、仙人が「もし王様になれば理想の王である転輪聖王に、出家すれば人々を導く聖者（ブツダ）となられ

る方」と予言が残っています。

釈尊の生まれた年代には多くの説があります。主なものは、シュリランカ、ミャンマーに伝わる紀元前7世紀、中国南部では紀元前6世紀、アシヨカ王の年代に基き紀元前5世紀とするものもあります。そして、日本では紀元前5世紀が有力でしたが、最新の発掘調査で、ルンビニから紀元前6世紀の木造建築の屋根が出土し、炭素の放射性物質の検査からこの建築物が釈尊誕生の証拠の最有力とされるにいたっています。同様に釈迦族の首都、カピラバストウについてもルンビニの西と、南へ十数キロのインド領ピプラバの二つの説がありいまだに決定できていません。そしてこの二か所は玄奘三蔵の『大唐西域記』にかかわる発掘でも両方の都市について記されているのです。

さとうりょうじゅん 昭和7年東京生まれ。大正大学、同大学院、インドデリー大学院に学ぶ。昭和34年より大正大学で教鞭をとり、教授、学科長を経て、平成14年退職、大正大学名誉教授となる。インドへの初渡航は昭和38年、以来インドへ訪れること、40有余回。著書は『ブツダガヤ大菩提寺』、『釈尊の生涯』など多数。

工 藤 量 導



アウランガーバード石窟の観音像

こぼれた涙のわけ
うつむく者にも光あれよれの道を照らすように
うつむく者にも風よ吹けよれの頬涙弾くように

(小谷美紗子「universe」より)



微

風

吹

動

先日、インド西部へ旅に出かけた。目玉はデカン高原に点在する仏教石窟寺院である。事前に文献調査をしていると、気になる存在にいきあたった。それは「諸難救済の観音菩薩像」である。

この観音像は5〜7世紀頃に造営された各地の石窟にみられる。正面向きの観音立像で、日本の女性的なイメージとは異なり、上半身に着衣がなく、髪を結って頭上で丸く束ねる苦行者の姿である。左手に蓮華の茎をとり、右手に施無畏印をむすんでいる。

特徴的なのは観音像の両側に、危難に遭遇している人々が救いを求める場面が左右四つずつ、計八場面（火難・剣難・枷鎖難・海難・獅子難・蛇難・象難・羅刹難）彫り込まれていることだ。一般的な『観音経』七難よりも悪獣による難が具体的に詳しく、象難を描くのはいかにもインドらしい。鬼女の島に漂着しないように海難の無事を願うのも、どこかコミカルだが、石窟寺院のパトロンでもあった貿易商たちの切実なあり様が反映されたものだろう。

この観音像の造形は、美術史としては地域的・時代的にほぼ孤立した表現で、中国や日本にはまったく伝わっていないという。

インドでの旅程はなかなかタイトだった。乾季の涼しい季節だったが、照りつける日差しはなお強い。石窟の中に入るとひんやり心地よく、時おり静寂も感じられる。図像の実際のサイズ感や位置関

係、光の陰影の具合を五感でもって学ぶことができた。

そして、いよいよ件の観音像にお目見え。とくにアウランガーバード石窟の観音像は優美な傑品で、危難場面も大きく、細やかに彫刻がなされている。よく見ると、すべての場面ごとに脚を後ろに蹴り上げて救済のため飛来する小さな観音の化身の姿がある。

観音菩薩はその威神力ではるか遠くを見渡し、困っている人の声に耳をそばだて、心を通して不安な気持ちを取り除いてくれる。苦の現場へと飛び出さずにいられない性なのだろう。私たちがよれよれになりながらうつむき進む道筋をほのかに照らし、同じようによれよれに歩調を合わせて、上を向いて踏み出せるまで寄り添い、耐え忍んでくれる。庶民に愛され頼りになる存在なのだ。

さて、石窟内での意外な驚きが、艶やかな肢体をもつ女性形の像が多いことだった。エローラ石窟に顕著だが、まさか僧院窟にこんなたくさん祀られているとは……。帰国してから調べてみたら、あれはターラーという仏教の女神らしい。実はインドでもっとも人気が高い女尊像で、釈迦像、観音像に次ぐ作例数をほこる。

後代の密教経典には観音の瞳より放たれた光からターラーが出現したと説かれ、チベットやネパールの伝承では、人々を救い切れない観音が失意のうちに瞳から流した涙の池の中にターラーが生まれ、

観音を励まし助けたというおとぎ話のようなエピソードもある。「ターラー」の語に「瞳」の意味があるらしく何とも興味深い。

8世紀以降、救済図像の主役は観音からターラーへと変移し、「ターラー菩薩八難救済図」としてインド、チベット、ネパール、東南アジアで絶大な人気を博した。チベットでは観音とターラーがカッブル的な存在としてとらえられていたという。ちなみにエローラ石窟には観音が主尊、ターラーが脇侍の三尊像も存する。

将来的に、文字通り八面六臂の活躍をとげることになる観音菩薩だが、生きとし生けるすべての者を慈悲の眼でもって観るというのは、想像できないくらいの大仕事だ。観音の涙からターラーが生まれたというのも人々がその辛苦を慮っての説に違いない。

とはいえ、観音菩薩は衆生救済のために大願を立て、次の世で仏になることが確定した、表立って弱さを見せられない孤高の存在だ。決して苦しさの末にくじけて泣いたのではないだろう。

乾季の砂ぼこり舞うインドで、まばたきをする暇もなくよれよれになりながら、それでも人々の苦難の現実から眼をそむけず真実を見つめ続けた観音菩薩の乾いた瞳。お節介な微風は、思わずうつむきこぼれた不意の涙を吹き弾き、ついぞその頬を濡らすことはなかったのではないか。そう願ひ詫したい。

江戸の川
を歩く

第三十七回

江戸ウォーカー

森清鑑

小貝川

北から三本の流れが並んで利根川に注いでいる。渡良瀬川、鬼怒川、そして小貝川の順で。小貝川の上流の流れは、隣の鬼怒川のような渓谷ではなく、勾配も穏やかで田園を走る、水路のような、たおやかな流れである。

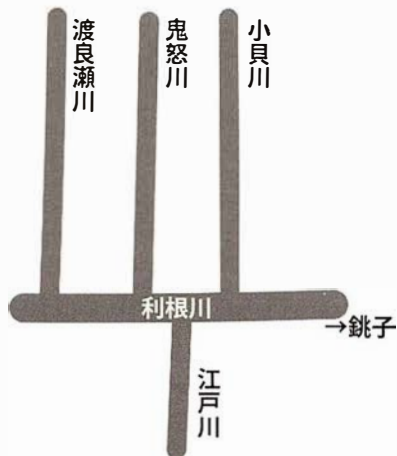
家康が江戸に入府した当時、利根川は幾筋もの流れに分かれ、江戸湾に流れていた。この利根川本流の流れを常陸川（銚子に流れ込んでいた川）に繋げ、銚子に向かわせる大工事が利根川東遷大工事である。いわば、家康の大江戸造り、最初の大仕事。その時小貝川は、鬼怒川下流ともつれ合って合流し、常陸川に繋がっていたのである。この利根川東遷大工事によって常陸川は利根川に吸収され、鬼怒川と小貝川は平行に利根川に流れるようになった。

利根川に注ぐこれら、渡良瀬川、鬼怒川、小貝川の三本の川は、船運物流からいっても、大都市、江戸構築に欠かせぬ重要な河川なのである。しか

家康江戸入府以前
利根川の流れ



利根川東遷工事後の流れ



し、小貝川の場合には、広大な農地に農業用水を提供する大きな役目を果たす。広い田園を走る小貝川の上流の景色は、溪谷でもなく、穏やかな風情。なのに、水は清らかで生物の宝庫でもあった。正に「春の小川」の感あり…である。

小貝川の源流

小貝川の源流は、日光の東、さくら市近郊の小貝ヶ池に端を発する。そこは東京湾上昇期の名残として、あちこちで貝塚が発見されている、なかなか山岳・丘陵池。池からあふれ出た水は、一筋の流れとなって、蛇行しつつ南へと流れる。小貝川は、天智天皇時代には蚕飼川と呼ばれていたらしい。当時から養蚕が活発に行われていたのであろうか。また、辺りの地名「曲畑」は、焼き畑農業から来ている地名だという。つまり太古の昔から人々が生活を営んできた処の証である。

益子

広く、なだらかな田園の中を小貝川はひたすら

南に走る。ややあつて、左を見ると益子の家並み。この町は益子焼きで有名。一八五二年大塚啓二が益子の土を使った益子焼きを開発。昭和五年、浜田庄司が益子で作陶を開始。陶器の町として一躍その名は全国にとどろく。至る所に陶器工房があり（浜田庄司記念益子参考館）、正に作陶の町の感あり。国分寺の柱石と見られる遺跡広場があり、歴史の町でもある。

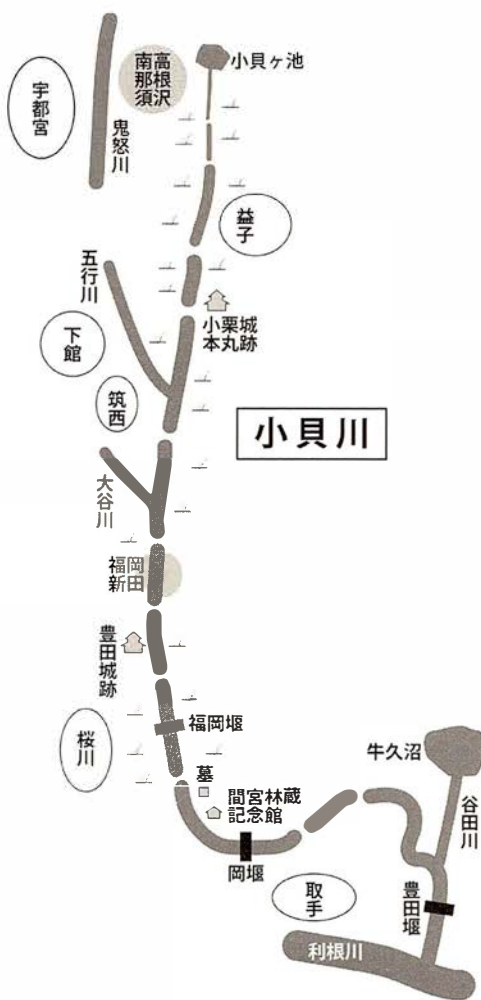
その南に、高館山があり、麓に獨鉈山・西明寺の広大な敷地が広がる。西明寺は七三七年行基の建立とある。日光を含む広域全体を支配していたのが宇都宮氏。益子を支配していたのが益子氏。そして益子氏は、十世紀あたりから宇都宮氏の郎党となり、行動をとにもする。「益子」という地名は、益子氏から来ている。この益子氏が西明寺に城を築く。寺社にして城の機能を果たす。西明寺の三重塔は、特に有名。

小栗、下館、筑西市へ

小貝川は益子の西端を通って南下。周囲はすべ

て畑。ややあって左側に、小栗城本丸跡が見えてくる。これがかの有名な小栗判官の城である。小栗の東に広がる町が桜川。ここも二宮尊徳が農政に尽くしたところ。川に戻って南に下る。小貝川の河川敷は、広がる。筑西市。右から、ほぼ平行して流れてきた、五行川が流入。この辺りが下館。かつて「関東の大阪」といわれたほど商業の盛んな町であった。ここから、ちよつと行くと、また大谷川が右から合流する。小貝川の河川敷はさらに広が

る。そして下妻。福岡新田を通過し、さらに南へ下ると、右が、常総、左が、「つくば」になる。やがて、左側に長峰城跡、右側に豊田城跡が見える。ともに石碑が残るのみ。豊田城は、常総の名家、豊田氏の居城である。ここを過ぎて、さらに南に下ると、福岡堰が眼前に見えてくる。頻繁に起きた、洪水を防ぐ、小貝川三大堰の最初、福岡堰である。福岡堰から、さらに南に下る。すると取手に出る。広い小貝川に面して方々に城跡が残っている。小貝



川を堀として利用したのであろう。まもなく、上流から二番目の岡堰が見えてくる。川は左（東）に曲がる。その曲がり口に岡堰が架かっている。

間宮林蔵

岡堰が設けられたのは寛永七年（一六三〇）。洪水対策と同時に堰に溜められた水は用水となり、相馬二万石と呼ばれる広大な新田が誕生する。堰は萱と竹を使った独特の工法（伊奈流）で島を造り、水を遮るといふもの。この工事は、治水と同時に大変、美しい風景を生み出した。江戸時代の観光名所。きわめて優れた自然工法だが、補修工事が必要になる。この堰の近くで一七五五年に誕生した、間宮林蔵は、青年になると堰の補修工事に参加する。そこで算数と地理の才能を見いだされ、国後、択捉の地図測量中の伊能忠敬から現場で観測法を教わる。これが樺太の探検という大事業につながっていくのである。間宮林蔵記念館は堰の手前、左側にあり、生家がそのまま記念館になっている。記念館の手前に専称寺があり、間

宮家の墓とともに林蔵の墓もある。

ここから小貝川は東に向きを変える。そして牛久沼から流れてくる谷田川を加えると、再び南に向きを変え、利根川に向かう。利根川に合流する一歩手前にあるのが、最後の三番目の豊田堰である。この堰も一六六七年伊奈忠治が中心となり、洪水対策、灌漑用水の確保のため、着工。明治になっても、毎年灌漑期に土砂にて小堤防を築き（築留堰）、灌漑期が過ぎるとこれを切り流すという方法を採用していた。そして明治三十四年、永久構造物としての煉瓦堰が完成。昭和五十二年、現在の近代堰に。灌漑用水の確保で大いに周辺地域に貢献している。

このように小貝川を鬼怒川と切り離し、二本立てで利根川に流し、利根川本流を銚子に向かわせるといふ大工事は、日本最大級の土木工事ではないか。これによって、江戸百万都市の礎となる、食糧、物資の運搬が可能になったのである。この大構想を江戸入府後、直ちに着手した、家康の偉大さが光る。

梶村昇先生ご逝去

当会講演会にて（平成27年6月）



二月十五日 正念往生の報をご子息梶村正彦氏よりいただきました。

先生は大正十四年（一九二五）のお生まれで、本年九十五歳でした。

当会にも、平成二十三年の研修会では、「いのちの無常と来世への希望」の題で、また平成二十七年には阿満利磨師との対談で「現代に生きる法然上人」をご講演頂きました。また、本誌にも「法然上人のお言葉」を二十八回に渡り連載頂き、和英対応『法然上人のお言葉』として単行本にさせて頂きました。

今は唯々還来穢国度人天を祈るばかりです。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第一〇六回

第三部

充実と稔りの白秋へ

渋沢栄一との縁にみちた親交 その五



月下氷人 は右翼の巨頭にあらす

前回詳述したように、当初は「敵対的」ですらあった渡辺海旭と渋沢栄一の関係は、一九一六年（大正五）の「仏教護国団」の結成をもって「友好的」に反転した。しかし、それはそれぞれが帰属する「組織」の動きに付随したものであって、それとは別に、そもそも両者をつなぎあわせた強力な「月下氷人」がいたようなのだ。これまで、それは「仏教護国団」結成と同年の国士館大学設立にからんだ、大アジア主義を標榜する右翼の巨頭の頭山満だといわれてきた。

すなわち、海旭が芝中学時代の教え子であった柴田徳次郎から、『大正維新の松蔭塾』を立ち上げたいので支援してほしい」と乞われて快諾したところ、柴田がかねてから師事する頭山満を紹介され、さらにその頭山から彼が国士館設立の「金主」と仰いだ渋沢栄一を紹介されたという人脈の流れである。

しかし今回、渋沢史料館でデジタル化された五十巻に及ぶ膨大な資料にあたったところ、どうやら頭山は、海旭と渋沢の「月下氷人」としては二番手であって、それよりも以前から、あるいは時期的には頭山のほうが早くても、二人を引き合わせる引力としては頭山よりもはるかに強い歴史上の人物が浮上してきたのである。その超大立者の「月下氷人」とは、一人はフランスのユダヤ系金融王のアルベール・カーン、もう一人はアジア初のノーベル文学賞受賞者でインドの詩聖、ラビンドラナート・タゴールである。

月下氷人の二人はユダヤ系金融王カーン

それでは最初に、アルベール・カーンが頭山よりも先に、渋沢と海旭の「月下氷人」であった可能性について検証しよう。

まずは、カーンと渋沢の略歴と両者の関係について簡単に述べる。

両者の人生の履歴は、出自と幼少時を除く

と、実に似通っている。

ちなみにカーンは、一八六〇年、日本では桜田門外で大老井伊直弼が殺害された年、ドイツとの国境のフランス領アルザス・ロレーヌの貧しいユダヤ人家畜商の家に生まれた。長じて南アフリカの金とダイヤモンド鉱山の投機で大ヤマを当て、一八九八年（明治三十一年）に銀行を設立、やがて金融業で欧米有数の大富豪にのし上がっていく。

片や渋沢は、カーンよりも二十年前の一八四〇年、老中水野忠邦による「天保の改革」の前年の生まれである。將軍徳川慶喜の家臣として、幕末・維新の転換期の一八六七年、六八年、將軍の名代としてパリ万博に出席する徳川昭武に随行して渡欧、勃興著しい資本主義の息吹きにふれ、これがその後の渋沢の人生を決定づける。明治新政府の経済官僚を経て、一八七二年（明治五）、ヨーロッパで学びとった産業資本主義の要として、第一国立銀行を設立。バンカーとしてのデビューは

カーンよりも二十年近くも早かった。以後、現在も日本経済の主要部門を支える有力企業の創業に次々とかわり、東京瓦斯、東洋紡、東京海上、王子製紙、キリンビール、太平洋セメント、大日本精糖など、その数は五百を超え、文字通り「日本資本主義の父」となるのである。

渋沢、カーン共に、CSR実業家の先駆

両者の共通点は実業家としての成功だけではない、今でいうCSR（企業の社会的責任）の先駆的提唱・実践者でもあったことだ。それこそが両者を強く惹きつけ合う磁石になったと推察される。

ちなみにカーンは、「青年たちに、机上の学問から離れて世界各地を周遊することで見聞を広めてもらい、将来にむけて有為な人材を育成しよう」という壮大なプロジェクト「世界周遊奨学金」を立ち上げる。海旭がドイツ留学をはたす二年前のことである。この「世

界周遊奨学金」制度の恩恵にあずかった中には、仏・米・英・独にまじって日本の若者も数多く含まれていた。一九〇六年（明治三九）から一九三一年（昭和六）にかけて、なんと十八人もがカーンの篤志によって丸一年間世界各地を周遊して見聞を広めることができた。

その後カーンは、当時最新鋭技術として登場したカラー写真と映像フィルムに着目、日本をふくむ約五十か国に写真家を派遣、近代化のなかで急激に変わりゆく二十世紀初頭の世界の姿を貴重なアーカイブスとして残したのである。

いっぽう洪沢は、実業のかたわら、「救貧」と「防貧」の重要性に気づき、東京養育院（現在の東京都健康長寿センター）、日本赤十字社、らい予防協会、慈恵会病院、聖路加病院などの設立と運営にかかわり、関東大震災時には復興寄付金集めに奔走。生涯で携わった社会福祉事業の数は、前述の起業の五百をは

るかに超える六百にのぼった。

そこには、「論語と算盤は両立する」という洪沢一流の温故知新の起業家精神があった。当時としては先駆的な洪沢の活動は世界的にも注目され、一九二六年（昭和元）と一九二七年（昭和二）の二年連続でノーベル平和賞候補に推挙された。後に経営学の泰斗 F・ドラッカーからも、代表作『マネジメント』の序文で、こう評価されている。

「経営の『社会的責任』について論じた歴史的人物の中で、かの偉大な明治を築いた偉大な人物の一人である洪沢栄一の右に出るものを知らない」

**ユダヤ人虐殺を見ずに死んだのが
せめての救い**

洪沢とカーンが実際に▲会ったのは、一八九六年（明治二九）、カーンが初来日したときである。当時フランス経済は低迷期にあつて新規起業が期待できる状況にはなかった。自

身の銀行設立を目論んでいたカーンが目をつけた投資先は、発展著しい日本であった。いっぽう日英同盟と露仏同盟の対抗の中で、フランスから日本への投資には、見えざる障壁があった。そこで、駐仏公使の本野一郎を紹介して日本の実業家と直接交渉を試みたのである。その甲斐あって融資に成功するが、そのときの「大恩人」の一人が洪沢であった。その後、カーンは二度来日、そのたびに洪沢と会食。また、パリ郊外のブローニユの自宅に日本庭園をつくるほどの日本最親になったのも、そのおかげであったと思われる。

東西実業界の二人の巨人の最晩年と最期もどこか似通っていた。

カーンは、一九二九年（昭和四）の世界大恐慌で大打撃をうけ、周囲から社会貢献活動の撤退を勧められるが、頑として応じず、結果すべての財産を失い、一九四〇年（昭和一五）に没した。カーンにとっての救いは、撮り溜めた「世紀の映像」が後世に残されたこ

とと、ヒトラーによって同胞のユダヤ人がガス室送りになる惨劇を知らずに済んだことではなからうか。

いっぽうの洪沢は、一九三二年（昭和六）、世界恐慌の余波で苦しむ人々からの要請をうけ、病身をおして大臣のもとへ赴いて「救貧法」の制定を訴え、日本の資本主義が健全に育つことを信じながら、九十一歳で天寿を全うする。洪沢にとっては、その後の日本が軍部の台頭のなかで統制経済となり、社会事業もろとも崩壊してしまうのを見ることがなかったのが救いだっただのかもしれない。

留学中にカーンに支援を求めた海旭

お待たせをした。洪沢とカーンとの関係についてはこれぐらいにして、いよいよカーンと海旭との関係について述べよう。

渡辺海旭もアルベール・カーンとは因縁浅からぬ関係にあった。ドイツに留学して五年を過ぎたあたりから、宗門より「仕送り」が

打ち切られ、やがて研究はおろか生活さえままならなくなった時に、しかるべき仲介者をたててカーンに支援を求めたのである。仲介者とは、前述の「世界周遊奨学金」制度の一期生の姉崎嘲風こと正治。周遊の途次ドイツに立ち寄って海旭と知己を得た折りに窮状を訴え、仲介の労を買って出てくれたのである。

海旭はさすがの気持ちで、以下の書状を日本に帰国した姉崎に送った。

「僕、嘗て此地に於て久しく交際したる医科の一老教授よりしてカーン氏の愛人を聞き、其富を散じて学芸を励ますの宏度を知り、また日本を愛好する頗大なるの雅量を詳にし、其人と相識らむとするの念、熾なりき。既にして同氏が東京大学に巨費を投じて老兄等を欧西に招聘したる美挙を耳にし、其普通の富豪が自然学に偏に実利の学芸にのみ常に資を給すること類を異にし、宗教学法理の如きに重きを置くの識度稍風俗を抜くものある

を感じて景仰の情、軫た深きを加へたり。而して当時僕、衣食の資、漸く乏きを告げ、研究之がために障碍を被るもの少からざるに当たり或は一たび書をカーン氏に呈して資を仰がむかとも考うるに至りぬ」(『壺月全集』下巻、五七四頁)

文面からは、カーンに対する海旭の畏敬の横溢がうかがえる。もとより支援を得るために「おべんちゃら」をいう海旭ではない。富豪が私財を投じる場合も自然科学のような実利にむすびつく支援がせいぜいだが、カーンの支援は宗教学などの根本原理を追究する学芸に向けられていることに景仰の念を深めた、と記しているのは本心からであろう。

しかし、畏敬にあふれる請願にもかかわらず、結局、カーンから支援はうけられなかった。おそらく、カーンの主たる関心と私財がカラー写真とフィルムによる「世紀の記録」へ向けられるようになったからかもしれない。だからといって、それを根に持つ海旭で

はなかった。むしろ自分の学芸に対する姿勢がカーンの眼鏡に叶わなかったことへの反省と、「金の無心」としか映らなかつた自らの至らなさを恥じたのではないか。

洪沢流「論語と算盤の両立」の集大成

以来、海旭の中ではカーンとの「やりとり」がわだかまっており、それが「三教会同」から「仏教護国団」結成に至るなかで甦ったはずである。かつて仲介の労をとってくれた姉崎正治が洪沢のブレーンとなっていることから、いやでもカーンとの「出来事」を思いだし、さらにそのカーンが洪沢と深い親交があると知って、なおさらのこと浅からぬ因縁を感じたのではないか。

いっぽうの洪沢はどうだったか？ 齢よ古稀を超えて五百の起業と六百の社会事業をやり遂げた洪沢にとって、「三教会同」を契機に立ち上げた「帰一協会」は、いってみれば「論語と算盤の両立」の集大成であつた。それに

対して、三十歳も年下の洋行帰りの学僧がさかんに「異議」をとなえてきた。洪沢は戸惑いを覚えながらも、ブレーンの姉崎から、かつてその学僧がカーンに支援を仰いだおりカーンに深い景仰の念を抱いていたと聞かされて、海旭のことを見直したはずである。

いづれにせよ、海旭と洪沢の二人は、国士館創設をめぐって頭山満から紹介される以前に、また「仏教護国団」結成のときに公式に出会う以前に、アルベール・カーンを媒介にして、互いの存在をつよく意識しており、それが当初の「敵対」から「友好」へと反転するきっかけの一つになった可能性は大いに考えられるのではないか。

(つづく)

さっちゃんね

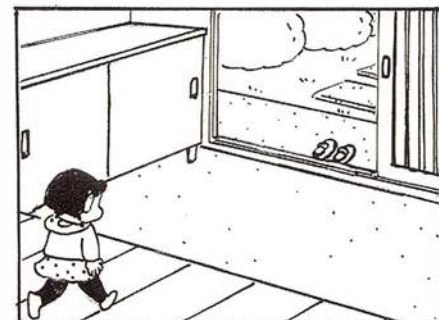
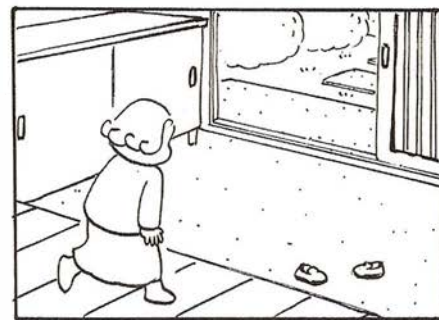
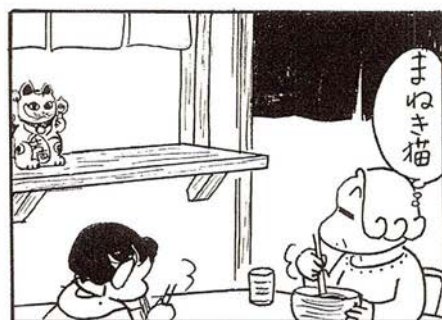
170

かい目

かまち♡よろう



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(京都新聞・静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞・徳島新聞)



編集後記

疾風に勁草知る五月かな

岱潤

新型コロナウイルスの猛威が止まりません。世界での感染者は約二百万人(四月二十日現在)を超え、感染症と人類の歴史の上でも、突出したものになってしまいう勢いです。この感染症は本当に誰でもが患ってしまう脅威があり、プロ野球選手からイギリスの皇太子まで、どれだけの体力やどれほどの境遇の人でもが患うという事実が我々にいつそうの恐怖となっています。見えない敵と戦うには、我々がしっかりとした免疫力を創るしかありません。免疫力は食事と睡眠をしつかりとることから生まれるのですが、もう一つ、スト

レスをためないこと、平穏な心でいることが肝要のようです。そのために大事なことは、笑顔でいることだそうです。笑顔は自然になることではなく、自分で作るものだそうです。口角を上げると、上がったところに若返りホルモンが出るそうです。その反対に額にしわを寄せると老化ホルモンが出るそうです。お氣をつけください。冒頭の句、疾風は強い風であり、勁草はその風にも倒れない強い草をいいます。新型コロナウイルスという強い風の中、今我々はそれに耐えるのかの人間力を試されているように思います。これは生き抜く力である生命力はもとより、どんな状況下で

も、人間として差別をしない心、相手をお願いやる心を保てるかということでもあります。つまらない噂やデマに惑わされることがなく、人として、明るく生きてゆく力があるか、まさに試されているのです。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十七巻 五月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 令和二年四月二十日

発行 令和二年五月一日

発行人 佐藤良純

編集人 加藤昌康

印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七四明照会館四階

発行所 法然上人讃仰会

電話 〇三(三五七八) 六九四七
FAX 〇三(三五七八) 七〇三六
振替 〇〇一八〇・八・八二二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
藤谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森厳寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤久雄(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光園寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
河本悠大(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村雅雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
成田昌憲(世田谷・大吉寺)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多将敬(両国・回向院)
松濤彦彦(芝・寶松院)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない

※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

お寺そして自宅で
心を落ち着かせて
経文の一字一字と向かいあう

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

浄土宗の日常勤行式が
写経になった!! 写経後は
オリジナルの経本
にもなります。



いまこそ写経を



写詠歌 セット

宗歌「月かげ」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット

詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう!

当会オリジナル新商品!! 申し込みは裏面へ

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級豪華の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。